

狭
山
の
石
碑

埼玉県狭山市教育委員会

狭
山
の
石
碑

序

社会情勢が急激に変化する今日においては、先人の残された貴重な歴史資料が失われる速度も、一層速くなっていくように思われます。

その中で、今回調査を実施した石碑については、建碑当時の姿をとどめる、数少ない資料だと思われます。普段、何気なく見過ごしてしまいがちな石碑も、その中には、どのような時に、どのような人が、どのような働きをしたかが記されています。これらを調査することによって、その地域の過去の出来事や、人の活躍についてがわかります。

本書は、市内の石碑のうち三三基を抄録し、報告書として刊行したものです。これが、市民の皆さんに、狭山市の歴史・文化財を知る一つの資料として活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査においてご理解・ご協力を頂いた、石碑の所有者の皆さま、また、調査に多大なるご協力を頂いた、狭山市文化財保護審議会委員の皆さまに、厚くお礼申し上げます。

平成一二年三月

狭山市教育委員会

教育長 野村 甚三郎

例言

- 一、本書は埼玉県狭山市内に所在している「石碑」等の調査報告書である。
- 二、所在調査は、狭山市文化財保護審議委員の協力のもと実施した。石碑の拓本については、狭山市文化財保護審議委員 横山淳一氏が手拓した。
- 三、調査は平成九年四月～平成一一年四月の間、数回にわたって行った。
- 四、調査にあたっては、石碑等の所有者の方々にご協力をいただいた。

目次

一、入間川地区

- (1) 前総持指月和尚行業碑 一
- (2) 綿貫家墓碑 五
- (3) 東西 六
- (4) 入間川邨市場之碑 七
- (5) 青物市場之碑 九
- (6) 金山先生頌德碑 一一
- (7) 芭蕉句碑 一二

二、入間地区

- (1) 竹友田口君碑 一三
- (2) 愛馬之碑 一五
- (3) 征清従事者記念碑 一六
- (4) 齋藤君碑 一七

三、堀兼地区

- (1) 佐野家墓碑 一九

- (2) 忠勇碑 二〇

- (3) 堀兼井碑 二二

- (4) 堀兼井 二三

- (5) 従軍之記 二四

- (6) 念祖修德之碑 二六

- (7) 國田幸三郎戦死記念碑 二八

- (8) 中講義 二九

四、奥富地区

- (1) 筆塚 三二

- (2) 繁翁碑 三四

- (3) 里英翁碑 三五

- (4) 工師山崎翁壽墳碑 三六

五、柏原地区

- (1) 増田正金五百年記念碑 三八

六、水富地区

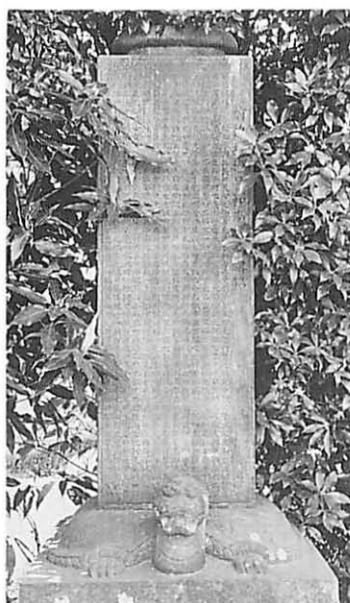
- | | | |
|-----|---------------|----|
| (1) | 治水工事成功記念碑 | 三九 |
| (2) | 埼玉縣令白根多助歌碑 | 四一 |
| (3) | 芭蕉句碑 | 四三 |
| (4) | 清水宗徳公德碑 | 四四 |
| (5) | 鶯蛙吟和 | 四七 |
| (6) | 富士見橋架設記念碑 | 四九 |
| (7) | 改葬墳墓碑 | 五〇 |
| (8) | 弁財尊天水神御堂再建記念碑 | 五一 |
| (9) | 芭蕉句碑 | 五二 |

第一章 入間川地区

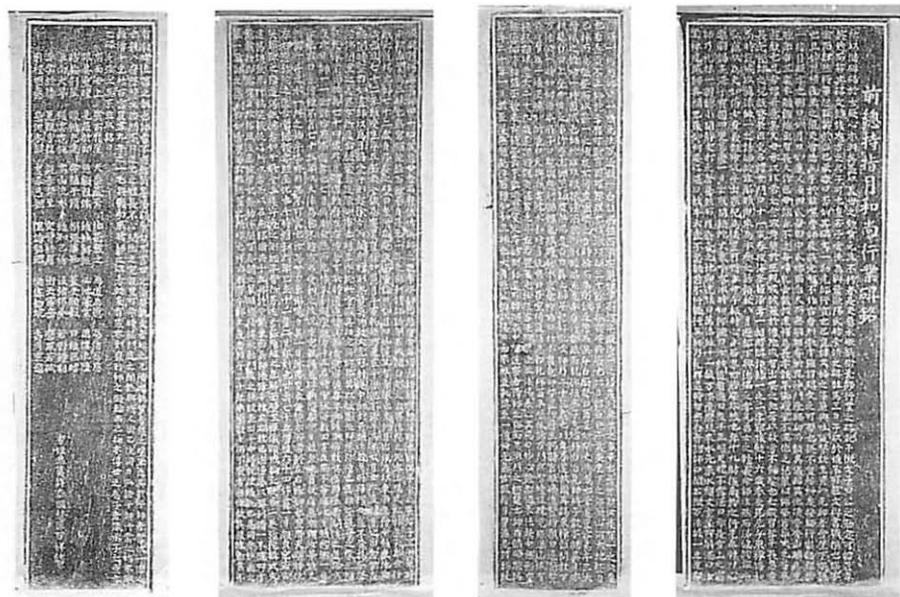
(1) 前總持指月和尚行業碑

所在地 狭山五七三番地

大きさ 高さ一二六cm・幅四五cm・厚さ二九cm



石碑写真



拓本写真

前總持指月和尚行業碑銘

所以儲碑碣於古厥心亦淵矣蓋以蓋世之勲業死且不朽者是夫屬承噉欲樹先師行業之碑就予徵文予曰公之勳寔可謂遺孝矣然而若其碑文諮諸大方之君子可也豈若予庸流爲與曩歐陽氏睹索靖之碑駐馬三日予以於惟不可匪文與書戮撰也倘不俞而肆然將事恐取笑於后已承噉曰否如其碑文一勒先師行實也已豈請文辭之藻麗與吐涎警欬至資知先師者舍座下亦孰也且如買橫返玉之儷夫舍諸矣予於茲嘿詹師覆踐宛有不作古者則孰亦強謂碑文之可否也終不重起艸虔按師行實師諱衢一指月厥字也別曰如月曰如蓮父須田氏母田中氏嫁而后久而無嗣朝昏祈毘沙門產師幼而穎異儀相異他項骨秀山眼具重瞳年甫三歲未離襁褓亟有長大作匪母端身不近每哺乳蚤戴竣速稍爲長亦敢不御羶葷不混他之兒輩以佛事若葬式之首爲遊戲也見者懷奇意矣父母亦以非常之念或考筭於巫覡或誠籤於佛陀咸有出塵之死焉以故嘗不飾髮也七歲習

學于長昌寺長老視師之兒戲驚畏困更名謂彖門曰十歲春投海峯薙染焉一朝睹牌頭歸一之二字竊懷疑十六歲春受毘尼乎東禪悟和尚時說戒以萬法皈一之話師於茲解頤由來爲本參之話頭秋八月遊都下與傀儡之宴見勇士之輕義命師泫然而涕淚於茲乎私竊以爲夫如俗士貴義輕命況乎出家兒爲法豈可惜身命乎振時心身器界恰若塵芥然也年十九叻催南詢之行先參禪叩心要嗣謁亮湛乎寶圓四更葛裘一日出衆問銑蛇火裏嚼寒冰時如何湛曰汝試道看進曰夜半正明天曉不露湛曰亦是雪上之霜師乃禮拜一朝聽小開靜交打之聲驀然而獲歡喜之地即述懷曰萬法皈一一皈萬法達磨現來水元來水趨丈室呈所解湛曰汝坐禪現成師再問已後如何要心湛曰放手太虛不忍能忍不行能行矣師乃禮拜退時有宗白者誥師曰聞公徹方法皈一且道即今歸一何處師曰一歸萬方法皈一白曰果然而未在東禪嘗不謂乎識得一之歸處則參學之事畢也焉然則必是有一之皈處也白急責不止師於焉靡可對言罔可陳理也憤激煩悶三十餘日抵寢食共廢也一日

謂白曰予曩受座下之侮勵山河大地暨自己抹而爲微塵而以齧一之歸處不得虛噬嚼也自時拼而爲粥飯之僧而果乎白勵聲曰爾甚如斯夫孱劣也學道豈容易子三大僧祇之修功一時圓成也師於茲双眼振泥茫然而倒臥不覺通身白汗豁然而脫卻桶底子急趨拜白白見師眸子敢不詰異日亦相見白曰上座今日之事作麼生師曰一切處無乖違白曰真之獅子兒好吼咬師乃二十三歲也明年春還故國再謁東禪卽問放下方法飯一時如何悟拳扇子曰灑與麼則髑髏裏眼睛枯木裏竟吟悟曰枯木裏竟吟暫置作麼生髑髏裏眼睛進豎指頭曰這箇灑悟曰乍爲一堆灰時如何進曰天與白雲曉水和明月流悟曰吾室得通消息卽禮拜爾來歷抵諸方門戶智燈祖曉竟照鳳山咸有機緣期以遠大二十九歲還寶圓親炙湛公之乎左右翌夏見任板首湛附原流並法偈表心其偈曰妙心證契傳衣法此中無影亦無像師資相值面授處古鏡臺前不假燈翌夏天岑結制師還而輔弼衆中有道察者得師之侮勵爲洞門之翹楚也師后韜晦駿陽殆乎二十年一日於至道無難話忽爾獲如如三昧也

大持照公諡以偈曰西來祖道孰傳東一道神光慕古風指月曹溪是何者現成脫體獨尊翁師四十四歲慈母老而靡依怙俟師之返哺以師區恩愛舍再婦古梓終慣陳蒲鞋也師偶乎今之庵殆乎三十年時中以淨業爲三昧也繕寫彌陀經百餘卷自是先二三之勝利請師結制若戒開后越之大昌信陽之矢寧上陽之松林逮天岑僉行戲之道場也師七十二歲自昼庵之壁曰老僧扁庵東西更諱曰如月曰如蓮且有旨趣也夫於月出沒乃以東西老僧今雖東他后必西且七十二年雖受生乎五濁未全穢爲塵累豈靡如應月乎万物無跡蓮在乎淤泥不染乎其年七月廿六夜期月之出念佛夜將闌時室內如晝師以爲月將登乎則起徐々而開戶嘯則無量壽佛放大光明射庵中師於焉振々殷々而踊躍母崖不覺揚勵聲念佛闍里之善男女折覆齒馳聚者庭際如市也明年亦於此宵感眞相宛同前年矣以故圖所拜感弥陀之眞相暨觀音之像三幅以充淨業資助矣七十四歲六月罹痼雖靡左右侍者亦此時遠近侍湯藥者僉宿德耆年師雖臥病敢以瘼弗瘳焉問侯之道俗以夜次日師一一酬對恰

若佛癩者也七月病漸愈然而片估不利起座假力乎左右時中沐浴數回晝夜脇不著席屺々然念佛一曰示左右曰老僧雖不肖七十五年以大法爲念不趨貧名愛利之岐況亦冤親無差以利濟屈今日然老來爾哉病患漸煩汝等惟夫所謂一斗之水一枘之油乎嗚呼因果不可虞也汝等努力莫懈囑々矣一日沐浴更衣飲餐亦若常談左右怙如也翌將天曙時使左右懸弥陀之像合掌低頭宴然座化也于時明和六年己丑十二月二日卯刻也世壽七十五僧臘六十四停龕一日顏兒宛若含笑葬斂之際道俗執紼者如于將全身瘞乎庵之側師乎昔所著述者弥陀經之直解面壁坐禪儀顯戒論之歌各一卷弥陀講式文逮偈頌老來艸稿望機泛心所以者而以名無根樹共十五冊於今鎮東西矣師機鋒辛辣左右敢區近傍屢以勝利請一不隨四十餘載折脚鐺兒自炊松風沒底椀中炊飯枯淡間有參請之輩臨機袪縛粘門庭之施設逸出乎今時就使雖執已見同參妙義之輩一至師之座下則恰如青鷹面前無燕雀之所啄也祥也服膺乎師之道者殆乎三十年未曾孜々而不厭者無他故其履

踐動業不有叔世流弊之執也師嘗不遊戲策墨偈頌章句勾不言世之藻華執文者眎之瓦礫之執質者獲之碧玉之矣於乎師者當代一偉人也親入音聲慧之法門不口道他之短長不心問他之冤親豈可今時謀門庭之鬪熱與擠人術已流同日而語乎師行業之始末縱雖僧千兔枯百蠶豈盡九牛之一毛與願向來睹師之碑者故爰有感慨則靡脂師之願輪而已抑亦得世之爲子者識承子之遺孝之碌々強之矣系茲以銘曰

高而母上

廣而靡崖

天奈蓋焉

地甚載之

爲道爲德

爲信爲慈

眼具重瞳

見過於師

然鍛祖佛

雖妙釘鏈

必泄菜葉

罔俾流隨

昉按劍輩

頗雖充達

今猶干鏃

搦張華知

蓋夫願穀

曰維匪脂

爭向大旱

獲雲霓施

高山流水

雖知已稀

沒弦獨奏

若對鍾期

淨業於熟

蓮臘月按

觀音勢至

交臂結眉

衝天富岳

磨風若砥

前程明德

奈何亦諮

虔奉恩誼

俚語銘碑

縱值劫燒

壽冉靈龜

劣姪邁莫祥泰瑞焚薶百拜誌

(2) 綿貫家墓碑

所在地 入間川一丁目二七八四番地の二

建 碑 享保十三年（一七二八）

大きさ 高さ六九 cm・幅四六 cm・厚さ四三 cm



石碑写真

(銘文)

日國東武藏州入間郡内入間川之郷者厥古相國新田
戰場而其聞委國本朝明于側在隔塵烟之地號堂山言
爲其勝與也南方莎々平原北方望瀉々入間流誠可謂
入間之丹丘其故原此所往古瑠璃興寺之白址也焉在
俗氏綿貫法號玄心居士云者厥志最甚厚而內持五戒
外正五常壯年而巡禮四國西國板東秩父圓通大士終
而請十方清衆讀誦大乘妙典一千部而以廻向四恩三
有畢今亦謀彼白址建堂安佛得達願於領主蒙許容乃
自拽石搬土敢無倦適隨鋤頭而得若干石碑磨之見弘
安貞治之間爲前亡後滅所立石浮圖也槃識傳來舊跡
最無誤矣居士甚歡喜而計願輪頓轉果數椽樓宇不日
落成安藥師聖像重而刻彫彌陀石佛而上報四恩下資
三有 仰翼 皇風水扇供日增輝 法輪轉萬世祈者
也豈享保第十三戊申秋穀且 謹誌

(3) 東西

所在地 入間川二丁目一番地

建碑 安政二年(一八五五)

題額 綿貫氏

書者 綿貫氏

大きさ 高さ一二五cm・幅六九cm・厚さ一七cm



石碑写真

(銘文)

西

山起庭中更彌縫未甘人喚小嵐峰
香風晴日園林好一半櫻花一半松

寄題綿貫氏園併書槐宇直道

東

我家に傳ふる所の山林田圃此碑をして
初杭となし分間繪圖を設け永く後
の證となすものなり

安政乙卯年三月綿貫栖荷建之



拓本写真

(4) 入間川邨市場之碑

所在地 入間川三丁目六番地

建碑 明治二十三年（一八九〇）五月

篆額 侯爵 久我建通※

撰文 河瀬秀治※

書者 大内青巒※

刻者 富澤久長

大きさ 高さ二五四 cm・幅一九五 cm・厚さ二五 cm



石碑写真



拓本写真

(銘文)

入間川邨市場之碑

農者造焉商者通焉二者備而後始可以言固爾夫村落者造富之處其居固不差於都府然而人皆慊邨落慕都府何也豈不以農夫之樸為野而商賈之華為文耶然則農與商其亦畫文野欲武藏國入間郡入間川邨其地膏腴其境四通昔者民戶僅三百餘耕桑之業甚隆嘉禾良藪倉儲廩積家家頗富然未嘗有貿易之道乃不免所謂農而野者闔鄉以為憾尚矣明治四十年古老胥謀始開互

市之場以毎月一及五之日交通其所儲積於是四境之民競集販賤賣貴獲利興産爾來僅二十年民戸増加無慮四百餘整然一市街非復曩時之邨落也便是從野轉文者愈進不輟則為都為府亦可期矣雖然農者是國之本而富之源也若夫徒貧市利而遺耕桑則本源終枯涸支流將安存焉可不慎哉頃者有志者協力欲勒於貞石以傳之後昆請余文余嘗令於入間縣與里民有舊誼故不辭而應之云

明治二十三年五月

從五位河瀬秀治撰

從一位侯爵久我建通篆額

大内青巒書

富澤久長鐫

※河瀬秀治―明治期の官僚・実業家。武蔵知県事・小菅・印旛・熊谷・入間などの知県事・県令を歴任。群馬・入間両県に洋式製糸工場を興した。

※大内青巒―明治期の在俗主義の仏教者。

「尊皇奉仏論」により、尊皇と奉仏を一体のものとして説いた。訓盲啞院を設立し、大正三年（一九一四）東洋大学学長に就任。多くの社会事業にかかわり「明治の維摩」と称された。

※久我建通―公家。文久二年（一八六二）内大臣に任ぜられるも、和宮降嫁の件で怨みをかい、任職を辞し蟄居する。慶応三年（一八六七）復職。明治に入り、賀茂神社・松尾神社の大宮司、宮内省の文学御用掛に任ぜられる。維新の勤王家であるとともに、和歌・絵画をよくした。

(5) 青物市場之碑

所在地 入間川三丁目二番地八号

建碑 明治三十七年(一九〇四)十月

撰文 山口正興

書者 山口正興

刻者 小池銀次郎

大きさ 高さ一二五cm・幅七二cm・厚さ一一cm



石碑写真



拓本写真

(銘文)

武藏國入間郡入間川者發水源于秩父山而中斷本郡
溶々東流以養沿岸數邨之田園復潤幾千之民家加之
春夏之候能產年魚不知其所獲幾何嘗知為天然之良
地由之以入間川為町名矣抑是地與川越相對古文明
以來所載歷史著明之勝地而豪農富商相接開其富源
者蓋可有元龜天正之頃嘗位於町中央有一商家曰鳴
崎氏輒蓄家之一面所為其業青物問屋者實曆三年癸
酉夏五月之朔始而距今凡百五十有餘年自曩祖鳴崎

又七君傳斯業昔々繼承而暨今日嗚乎可謂盛矣曩日當地小澤氏偶開同業將試竞争然有故奄見廢業當家六世主與右衛門君初名稱島太郎自幼穎悟長而倍有節概最富進取之氣象嶄然頭角嗣業鞠窮精勵不顧他事大博華容之信用累吉之襲產臻當代彌鞏固而所厭倒他之同業者蓋匪偶然也既而遭遇千明治大政維新之盛吉被選拔入間川村戸長爾來注力於教育疊々乎而圖之普及傍憐鰥寡孤獨然不棄殖產之道顧慮本業之擴張與町政之改譴夙夜殆忘寢食就中致稅務収支益正確而無些錯誤得使部下衆民莫遺憾名聲隆隆當時人呼而為廉直之君子匪不敬服者在職幾九年而同十七年辭職後同二十二年因町村制實施更村稱入間川町矣君漸富春秋而身神健康記臆猶不甞為人所以羨焉同二十九年一朝被為病魔胃同年十二月十六日溘焉遠逝矣享齡七十有三嗣子繁太郎君性至孝能守父翁之教訓繼業更名稱與右衛門益極繁榮同三十五年夏俄然有企圖斯業分裂者於茲乎畜市場者方將衰滅豈荷主諸氏者奮然贊焉暨山方總代數名者

孜孜而圖之恢復臻再開維持舊態之道因之永久不渝之基礎稍確立焉適當主與右衛門君欲勒斯業之起源沿革與先考之功勞以傳於後昆而屬予請文予愀然于茲誌其梗概云爾

明治三十七年龍集甲辰季穉十月穀日

尚齋山口正興選并書

咲尔保布 花もひとつ耳 加春美都々

お本ろに以徒類 春能夜乃月

石工 川越連雀町 小池銀次郎

(さきにおふ はなもひとつに かすみつつ

おぼろにいづる はるのよのつき)

(6) 金山先生彰德碑

所在地 入間川四丁目五〇一八番地

建碑 昭和八年（一九三三）五月

撰文 三志會長 齋藤半之助

書者 陸軍少將正五位 平田幸弘

刻者 武州入間川 石熊

大きさ 高さ三〇九cm・幅一二〇cm・厚さ二〇cm



石碑写真

三志金山坂次郎先生ハ弱冠ニシテ我ガ入間川町ニ來リ育英ノ業ニ携ハレシヨリ實ニ五十年ノ久シキニ互リ或ハ教育ニ従事シ或ハ自治ニ身ヲ委ネ恪勤一日ノ如ク其間町發展ノタメ施設經營セラレシ所一々枚舉ニ遑アラス其薰化ハ遠ク隣接町村ニ及ヘリ先生ハ我町ヲ墳基ノ地ト定メ常ニ至誠以テ町民ノ良友タランコトヲ期セラル利己主義萬能ノ現代ニ於テ其美シキ心情ハ吾等ノ最モ敬仰スル所ナリキ茲ニ同志相謀リテ碑ヲ建テ先生ノ事蹟ヲ録シ以テ不滅ノ功績ヲ永遠ニ顕彰ス

川越藩士金山達徳二男慶應三年七月三日生ル

明治十六年五月入間川町ニ來ル 大正四年七月

入間川高等小學校長退職 大正六年十二月ヨリ

入間川町助役ヨリ町長トナリ昭和二年十二月退

職 大正九年六月勲八等瑞寶章下賜 昭和五年

七月老後慰安ノタメ三志會設立 昭和六年十月

一日逝去

昭和八年五月 三志會長 齋藤半之助撰



裏面拓本写真

(7) 芭蕉句碑

所在地 祇園一三番地

年代 大正年間

大きさ 高さ一六九cm・幅六〇cm・厚さ一七cm

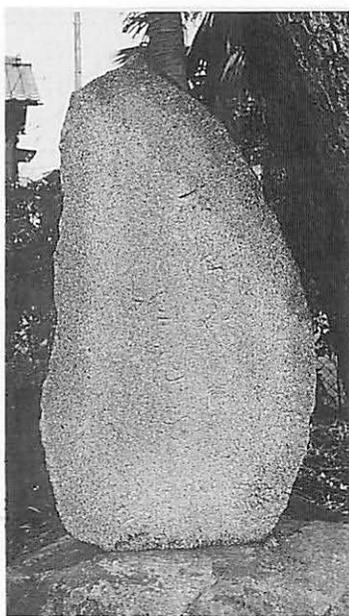
古池や

蛙飛びこむ

水の音



拓本写真



石碑写真

第二章 入間地区

(1) 竹友田口君碑

所在地 北入曾一三六四番地

建碑 明治二八年(一八九五)十月

篆額 伯爵 土方久元※

撰者 文学博士 川田 剛※

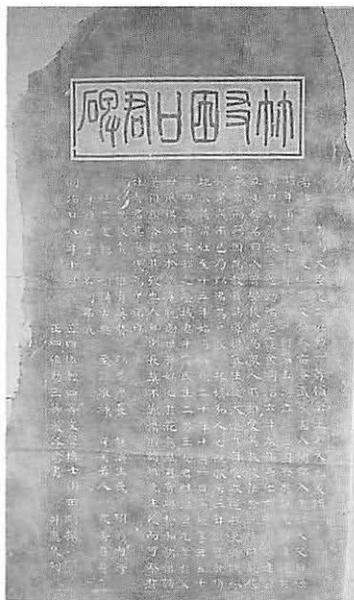
書者 巖谷 修※

刻者 井 亀泉

大きさ 高さ一九三cm・幅一三〇cm・厚さ二五cm



石碑写真



拓本写真



裏面拓本写真

(碑文)

宮内大臣從二位勲一等伯爵土方久元篆額

君諱宗平竹友其號又稱蚊雷庵武藏國入間郡入會邨人父曰保明年甫十九補年寄職無何辭去游江戸學國典於塙忠寶漢籍於關口貞齋孜孜勉勵殆忘寢食明治六年卒邨与他六邨相議建公立小學名曰入會學校君為衆人所推受其教授法於厩橋師範校卒業而歸因為教員誘導得宜生徒大進九年官改選邨吏物議紛擾累歲不已乃以君為戶長一邨協和人心悅服居三年欲罷就間地衆請留任至十五年始得解職二十年十月一日病歿享年五十有四葬於本邨之塋域妻牛窪氏生二男三女君性温厚尤孝於父母夙得令譽於鄉黨晚謝世務娛心於花鳥風月寄與於和歌俳諧著俳諧合鑑其歿也人無少長莫不歎惜所謂鄉先生歿而可祭於社者君其庶幾焉乎銘曰

以為教員 能育英賢 以為戶長 能濟生民

矧修内行 純孝愛親 矧講古典 至誠敬神

哥矣若人 衆善在身 身雖亡乎 名則弗泯

明治廿八年十月 正四位勲四等文學博士川田剛撰

正四位勲三等巖谷修書

井龜泉刻

(裏面俳句)

落際の

念那き桐の

一葉哉

※土方久元—幕末・明治期の政治家。文久三年(一八

六三)、三条実美の衛士・学習院御用掛となり、実美らの都落ちに随行。薩長連合の成立に尽力する。新政府成立後、農商務大臣・宮内大臣等を歴任。辞職後、皇典講究所長・国学院大学長・東京女学館館長などをつとめて、教育の発展にも尽力した。

※川田

剛—幕末明治期の儒者・文人。号は甕江。明治八年（一八七五）、太政官修史局一等修撰となる。その後、東京大学教授・貴族院議員・東宮侍読等を歴任。晩年は「古事類苑」を監修。性格温雅にして洒脱。文章特に碑文に秀でていた。

※巖谷

修—明治期の書家。号は一六。書ははじめ中沢雪城に学び、後、清人・楊守敬に六朝の書法を学び、右肩下りの独特の書風を確立し、一家を成した。退職後は各地を訪れ、人々の求めに応じて揮毫したので、その書跡は各地に残っている。

(2) 愛馬之碑

所在地 南入曾六三四番地の三

建碑 大正三年（一九一四）十二月六日

撰者 陸軍少将吉田平太郎

書者 陸軍騎兵大尉大高盛哉

大きさ 高さ一二四cm・幅八一cm・厚さ一九cm



石碑写真

(碑文)

軍馬盛敏號陸中國下閉伊郡川井村産毛色漆黒體長四尺七寸屬騎兵第十六聯隊日露役起也爲栗原近治乘馬以三十七年八月上征途爾來于沙河于黒溝臺于奉天馳驅砲煙彈雨之中又深入北蒙每使其主能奏偉功及平和克復再渡海至韓國從事討伐二年四十二年爲除役舊主上等兵特請飼育之其郷以酬其勞使送餘生大正元年八月終病死年齒正十六歲乃建碑誌之亦情之不可已者也 銘曰

仁人於物 愛及屋烏 況是戰場 戴主馳驅
有功不思 世情淺膚 愛馬之碑 德終不孤

陸軍少將吉田平太郎撰陸軍騎兵大尉大高盛哉書

入間郡入間村大字南入曾

後備役陸軍騎兵上等兵栗原近治建之

大正三年十二月六日



真写本拓

(3) 征清従事者記念碑

所在地 南入曾六四一番地

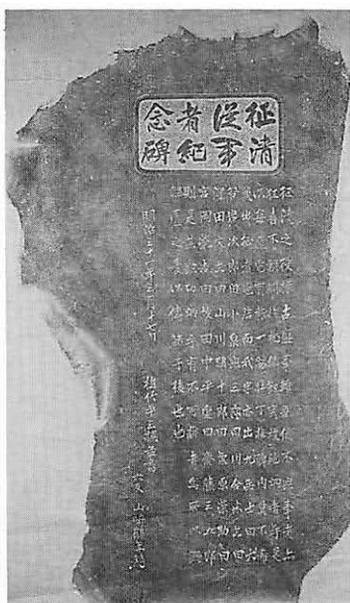
建碑 明治三十一年(一八九八)三月十七日

撰者 植竹平三

書者 植竹平三

刻者 山崎鶴年

大きさ 高さ一二六cm・幅八六cm・厚さ一九cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

征清之役振古盛事雖吾儕不興事者亦狂喜不輟矧於枕銃劔寔被袍烟者乎是以每飛電有報一勝壯丁撫髀肉莫不希冀出征者也然而我字亦出九兵士曰大谷岩次郎曰小泉典三郎曰川合米吉曰澤田文吉曰山川彌十郎曰栗原榮助曰宮岡榮吉曰故田中平重曰齋藤三五郎則是其勲切炳乎有不可捨者焉廝以蠲韞匱之憂以傳諸乎後世也

明治三十一年三月十七日

植竹平三撰並書

六反山崎鶴年鐫

(4) 齋藤君碑

所在地 南入曾八九四番地の一

建碑 明治二九年(一八九六)十一月六日

撰者 植竹平蔵

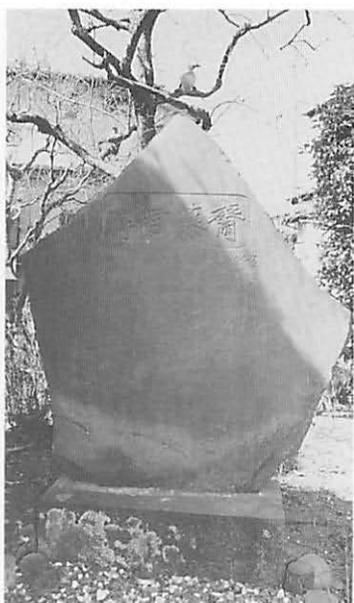
書者 植竹平蔵

刻者 吉野 豊

大きさ 高さ一三一cm・幅一一七cm・厚さ一二cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

君性齋藤名董右衛門號可遊爲人誠篤好學有德行巧辯說尤能書筆力飛動常聚弟徒授書法諄々不倦其徒皆德之中辭不教選長入間村村手書籍者少矣而君獨不廢學遂師于一鄉豈不偉哉明治二十九年九月六日君病歿享年六十有八葬於先塋之次有一男三女男喜重嗣銘曰

天悠々然 地茫茫然 逝者不歸 刻銘永傳

明治二十九年十二月六日

植竹平三撰並書

吉野豊 刻

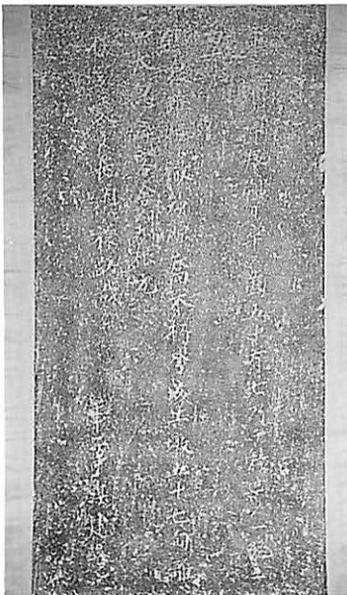
第三章 堀兼地区

(1) 佐野家墓碑

所在地 堀兼一〇五五番地の一
 建 碑 明治十九年(一八八六)二月十八日
 大きさ 高さ六八cm・幅三三cm・厚さ三三cm



石碑写真



拓本写真



拓本写真

(碑文)

氏ハ佐野字ハ野有逃水庵ト号ス俗称ハ吉右衛門父
 ハ北入曾村ナル田口氏ノ次男也幼時ヨリ志ミヤヒ
 ニシテ他事ニ觸ワタラス算學聯誼ニ心ヲ寄セテ殊
 ニ筆把ル業ニ長セリ二十餘齡ヨリ兒童筆學ノ師ト
 ナル翁ノ門ニ游フ者其数凡百三十有餘人晩年詩歌
 ヲ嗜ミ善ス明治二年ノ秋ヨリ病ニ罹リテ同シ三年
 庚午ノ仲春朔日卒ス齒五十有七乃チ辭世ノ一絶一
 句有リ

鑑泉雖掘徹知源喬木朽兮成土墩五十七句離

四大忽辭客舍到根元

杖笠モ入ラヌ長閑ノ旅路哉

筆子中謀建立之

(2) 忠勇碑

所在地 堀兼一二二番地の二

建碑 明治三九年(一九〇六)五月

篆額 陸軍大将 乃木希典

撰者 埼玉県知事 大久保利武

書者 縣立浦和中学校教諭 赤松定郷

刻者 小池角年

大きさ 高さ二二五cm・幅一五五cm・厚さ二八cm



石碑写真



拓本写真

(碑文)

我與露開釁也我所呂每戰必勝宣揚國威於宇內者豈非呂其有五千萬一心呂敵王愾榮進叀而辱復生之氣節乎明治三十七年二月宣戰之詔降也我陸海將卒皆從瘡微之軍當此時我縣入間郡堀兼村出從軍者九十二人而其叀節者九人也其渡海而進也鴨綠江南山旅順遼陽沙河奉天所向攻而無不取圍而無不拔若夫邁往敢進碎於彈丸叀於鋒刃呂竭報國之大節者其壯烈有足人感憤激廟焉宜矣交兵二十閱月於陸使敵連戰

連敗遂奔竄於遐僻於海于仁川黃海于旅順于日本海

殄敵艦隊擒敵將師焉和議茲成使敵到滿州之利權於

我又置統監府於韓國我 皇之威武震於八紘國

運日呂興隆可謂從軍者之功烈亦大矣堀兼村夙存尚

武之遺風多盡力於恤兵者頃者村人相謀起戰捷紀念

園于鄉校之後欲建碑呂記從軍者之功烈來求余文方

今諸軍悉旋鄉黨歡迎之而叀者不與焉賴有此舉呂

得生還戰叀共傳其芳名於後代亦可呂喜也乃記之係

呂 銘曰

忠肝義膽 百夫之防 勇戰奮門 隕命邊疆

厥生厥叀 俱騰國光 維動維烈 貞珉煌煌

入間之野 箸于戰場 堀兼之井 名于歌章

地也人也 芳聲揚揚

明治三十九年五月

陸軍大將正三位勳一等功三級男爵乃木 希典篆額

埼玉縣知事從四位勳四等 大久保利武 撰

埼玉縣立浦和中学校教諭赤松定郷書

※大久保利武―大久保利通の三男。内務大臣秘書官、鳥取・大分県知事を経て、明治三十八（一九〇五）年、第十三代埼玉県知事となる。

※乃木希典―明治期の軍人。日清戦争では、歩兵第一旅団長として従軍。日露戦争では、大将・第三軍司令官として旅順要塞の攻撃を指揮。明治四十年（一九〇七）学習院長に就任。風紀の乱れを厳しく取り締まる教育を行った。

(3) 堀兼井碑

所在地 堀兼二二二〇番地

建 碑 宝永五年（一七〇八）三月

大きさ 高さ一七〇cm・幅七三cm・厚さ二六cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

此凹形之地所謂堀兼井之蹟也恐久而遂失其處因以石井欄置拗中削碑而建其傍併以備後監

里語掘而難得水故云余以兼通難未知只從俗耳
寶永戊子年三月朔

(4) 堀兼井

所在地 堀兼二二二〇番地

建碑 天保一三年(一八四二)五月

大きさ 高さ一四七cm・幅九三cm・厚さ一五cm

(碑文)

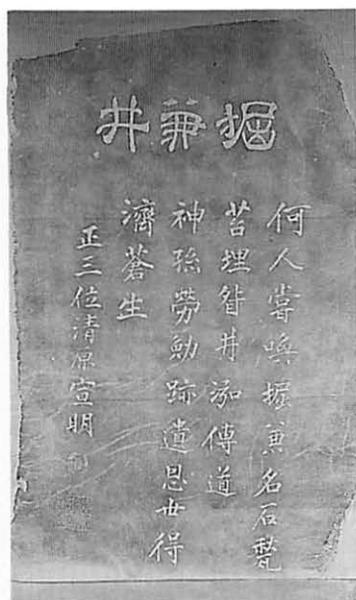
何人嘗喚堀兼名石甃

苔埋智井泓傳道

神孫勞勉跡遺恩世得

濟蒼生

正三位清原宣明



拓本写真



石碑写真

(5) 從軍之記

所在地 青柳四七五番地

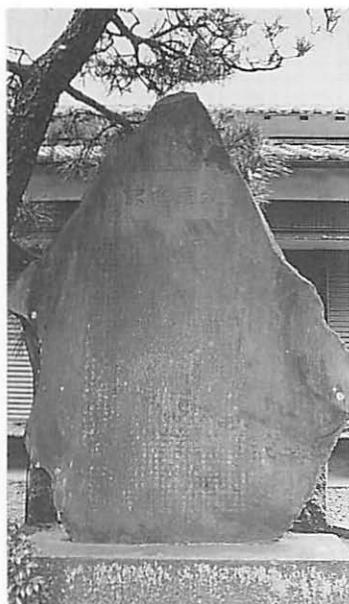
建碑 明治二十九年（一八九六）十月

隸額 岳陽 増田 貢

撰者 汪水 利根川 丈雄

書者 堯圃 山田 遜

大きさ 高さ一九五cm・幅一五五cm・厚さ八cm



石碑写真

(碑文)

從軍記

東京 岳陽増田貢 隸額

川越 汪水利根川 丈雄撰

堯圃 山田 遜書

我明治廿七年朝鮮失政東學黨者起亂政府制禦不能
克請救於清而致其兵也我邦亦證前年天津之盟陳朝
鮮獨立之意而清人弗聽出不遜之言我公使以聞而
天皇震怒直降戰勅先遣山縣野津諸將與清兵累戰破
之而彼尚不屈故九月十五日車駕駐蹕藝之廣嶋而為



拓本写真

大本營其廿四日武州入間郡青柳邑民小峰熊藏味岡長吉諸口嘉吉奧富卯之助二野宮作太郎應徵兵為從山地中將到本營翌月既望與海軍數艦偕發宇品冒濤而道十九日抵朝鮮大同汪廿四日鷄鳴入清花園河口而占要害十一月五日始與清兵戰大和尚山下大破之爾後每戰常勝將士氣勢自倍次日拔金州城據之七日黎明襲大連灣敵棄守而奔即置戍為備十六日自金州將攻旅順以第十五聯隊第一二大隊守城廿日午後攻旅順翌日午後陷之敵死傷無算我兵死者僅二百餘此日可敵六千窺金州城之兵寡從復州來襲邀擊城東北而走之廿二日旅順敗兵數百逃至金州城兵擊而鑿之金州之北有四城二壘其一曰普蘭店距金州一日程十二月二日拔之頓兵月餘其二為復州距普蘭店七八里十二月四日以步兵一大隊為斥候攻復州一舉取之而以非要衝棄之復還普蘭店其三為熊岳去復州二十里廿八年一月三日曉發普蘭店過復州攻熊岳敵不抗而走乃據之其四為蓋平同月十日攻之時沍寒凜冽兵氣自若輒拔之其五為太平山距蓋平四里二月廿四日味

爽蹈積雪而攻陷之其山下一里曰老爺廟其東西曰七里溝同日又夷西七里溝其六為營口去西七里溝三里三月六日下之九日擊田庄臺敵眾崩潰無復抗者彼遂納地及金於我而乞和平 天皇聞而許也實明治廿八年四月十七日也次月因宣凱旋之命廿二日發大連灣廿八日還東京屯營同火五人偕不被一創且不為瘴氣所冒而歸鄉其十二月三日同邑高橋市五郎亦自台灣効勞而還味岡等迎而告從軍之概市五郎喜之亦語其戰狀曰日清之講已成臺灣入我版圖而頑民不肯服故再隸 北白川壬五月廿二日自旅順還沖城灣廿六日向台灣廿九日抵曳庭灣敵避可半里因上岸與全山敵戰而走之六月三日與海軍俱攻基隆取之一二日陷台北城而據之廿一日從境大佐擊楊梅曆聞新竹之道翌日取新車乘勢攻新竹敵棄城而走廿五日敵返襲圍城數重城兵病之固守俟援凡四十餘日八月六日後繼之二旅團與台北兵合擊破走二城間之敵而新竹圍始解八日破枕頭山尋攻尖筆山敵不戰而遁十三日取后龍城敵憑城後之險而死守甚固然與后龍同日敗之其西

廿里曰大肚鷄有二城一曰台湾二曰彰化相距五里廿四日二旅團陷台湾自是合軍向彰化其北半里有河曰大肚廿七日夜我一隊至左岸成備一隊傳彰化城後翌日天明隔川排戰連破之敵不覺城後有兵故悉衆出臨右岸城後兵窺虛入城而右岸之敵亦不能支逃而還城因中外來擊殲六百餘人逮夜又取鹿港十月八日擊大保林敵不交兵而走明日進陷嘉義城二十一日仙台二師團乘勝追北下台南城皆望風而走十一月十七日振旅上碇打狗港而還同姓久次郎市五郎歸之歲九月從松岡少佐之澎湖戍八閱月今年五月無事歸鄉於是前後七人協議擬勒戰狀於石以建鄉之社園邑中有志者各自出皆助焉頃味岡等來求余紀從軍之概余不交且處士故不知日清間之事實因經緯味岡氏所記而塞責云

明治廿九年丙申七月

(6) 念祖修德之碑

所在地 青柳六一四番地の一

建碑 明治三七年(一九〇四)九月二三日

撰者 日東村老隱 内田正信

刻者 川越 富澤久長

大きさ 高さ九八cm・幅九一cm・厚さ二六cm



石碑写真



拓本写真

(碑文)

恭徵於武藏風土記往古正慶際北條高時禪門之徒金子和泉守國重者沒落而來居住于本郡金子領三ツ木村改其氏稱三ツ木爾後又移住於此地而開拓三ツ木村因其氏名村落故有東西三ツ木兩村矣其故家三ツ木勇右衛門氏則開墾於本村泉州國重之子孫而其先出自武藏七黨之一金子十郎家忠公云蓋勇右衛門氏曾文祿四年分業其一子本村青柳宇於新屋敷更創立一家是稱庄右衛門抑為我三ツ木氏祖爾來子孫

連綿實庄右衛門氏則其十三世之後胤也然星霜三百年來餘慶安延寶以降其支族漸分為五家則彙吉君倉右衛門君助造君金藏君等皆其後裔也然長太郎君之先庄左衛門氏雖係慶安紀元於分家其子孫僅三代而一旦廢絕矣然元祿二年本村堀兼高橋五左衛門氏有故分業其弟以再興廢絕亦稱庄左衛門爾後冒高橋氏云距今百八十八年餘長太郎君則其八代之後裔也獨岩田澤吉君固雖屬於他族亦有多少由緒參加之矣蓋方今社會之氣運駁然日進月步世開風化人文發達亦非舊觀唯恐後來外交外通種族混淆其本源漸遠支流更踈茲一族相謀而欲銘其事蹟於石以貽後昆以文囑余余嘉諸君追遠之厚志殊於三ツ木氏亦舊識也故應其需而不敢辭乃忘其固陋誌其事矣經曰無念爾祖聿脩厥德是之謂乎

明治三十七 辰秋九月二十三日

日東村老隱内田正信撰
川越 富澤久長鐫

(7) 国田幸三郎戦死記念碑

所在地 東三ツ木二一〇番地

建碑 明治四十四年（一九一）春

題額 陸軍大将 乃木希典

撰者 信濃散史 譽田信道

書者 信濃散史 譽田信道

刻者 富亀巖

大きさ 高さ一七三cm・幅一四六cm・厚さ二八cm



石碑写真



拓本写真

(碑文)

国田幸三郎戦死記念碑

不體信望最高不行義企最大語公明名不正唱平和實
不副夙挾斯種彗術帝業霸道發張敢進亞蒙吞南歐那
嚙北之略竟以從西加東於是乎至日露會戰而彼可止
不止好戰我欲止難止應之是在我則義戰也矣若夫責
彼之頑冥却惜瀆言姑措焉唯感我國家空前之災厄而
已丁此秋也彼我之海陸二載二百萬也未曾有之大軍
爭地球之中原乾坤爲之震動雖然自古誇強驕勇者摧
昔以金剛三千之孤旅破鎌倉百萬之大兵以米洲烏合

之民衆退英国節制之猛勢其然不體行於信義則無天地無國家強勇決非眞強勇況於一徹惘腹之不可也志虞故苟任戎事者須體確信以行大義乃雖一介之身世滅而萬代之名分存矣茲故陸軍步兵一等卒國田幸三郎者武州入間郡堀兼村東三木係於石田禮部三成遠裔朱閩一族先考喜平治之第三子也明治九年九月生焉性容溫凜篤學富力廿九年十二月入于步兵第三聯隊卅二年十一月歸省卅七年三月膺日露戰員四月十一日上從役露發東京由廣鳴宇品赴任清國盛京省五月十八日始戰閩家屯轉鬪金州南山旅順王家屯土城子水師營等十一月廿六日於松樹血苦戰格鬪之末陣歿時年廿九屍骸不試四旬明春一月四日我軍物色得之厚収 天朝追賞叙勳八等功七級賜時金百五十圓助金五十圓而后 官祭靖國私祀先塋是將大義之下名分存於戲宣哉仲兄德太郎亦先在軍依清蕃戰鬪之功領勳八等瑞寶章從軍記章賜時金六十圓其日露役卅七年十一月從軍接戰連鬪月餘罹痾還京於廣尾分病院療癒卅八年六月皈鄉尋進勳七等夫斯兄有斯弟

骨肉并出奉公蓋家門之名譽也而今也厥弟亡矣伯父喜三郎追悼欲傳之不朽母增子妹霜子琴子俱贊此舉就余需文因造屬銘 旌表忠烈無窮邦家長賴有衷陸軍大將正三位勳一等功一級伯爵乃木希典題字
明治四十四年辛亥乃春 信濃散史譽田信道撰並書

富龜巖刻

(8) 中講義

所在地 上赤坂二四六番地

建碑 明治三二年(一八九九)十一月

撰者 植竹平藏

書者 植竹平藏

刻者 山崎鶴年

大きさ 高さ一八三cm・幅一五〇cm・厚さ二四cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

大川 義純

碑

大川 ふさ子

大川氏名義純號汲古父大教院鏡純母一瀬氏安政五年入大峰受修驗道於醍醐三寶院業成而下山專授學近鄉之子弟如先考之例維新後出東都學於井上賴國先生居少時補教導職次拜神米金村稻荷神社祠掌後入明倫學校復修其學既謂空學不如實務拋書冊寓青山茶場從事茶業捨有餘年齡正六十五頃者與門人議豫設墓碑夫學有死學有活學得所擇在其人存矣如君所謂其人乎

植竹平藏撰並書

明治三十貳年十一月

石工 山崎鶴年鐫

辞世 自筆

我靈能奥城尔

千代込て

連なる枝の

花を守ら舞

(わがたまの おくつきどころに

ちよこめて

つらなるえだの

はなをまもらむ)

第四章 奥富地区

(1) 筆塚

所在地 下奥富八四四番地

建碑 嘉永五年（一八五二）五月

題額 中澤俊郷※

撰者 太田玄齡

書者 中澤俊郷

刻者 本多源治郎

大きさ 高さ一九三cm・幅一六六cm・厚さ二一cm

（碑文）

凡情之見于後者道之存于前也道何在行乎己者是情何在存乎人者是松井翁名貫忠字芳邱一字五平初倚花墨堂離下率其筆法號花生堂為人温和莫有刻薄之事於門生也強項童子猶無苔督若有過必微詞婉諷如恐傷之故百口一談莫不賞其教奥富為新見侯采邑時合邑推翁為里長翁性任見人之急必趨不顧其家故致活計之蹇剝於此將辭其職以侯不許入青蓮門中由其舊章登叡山薙髮號法橋松翁侯不得已使翁長子為里長其獲乎上下如是則行乎己者可知也凡隨翁之門墉蒙其薰陶者二百有餘人皆感翁之德而欲築塚埋其退筆刊石存其墨痕長留廣福寺境中嗚呼衆多之人其情之厚如是其心之一亦如是翁平生之所教使之然也今於翁生前述其事略則當稱壽藏記也然從衆人所索強曰筆塚

嘉永五年壬子夏五月

太田玄齡撰

中澤俊郷書并題額

天地の恵はあれとおひたつも

ころろつくしの庭の若くさ 松翁

奉納地主金三兩

筆子中建之

深川伊勢崎町

石工 本多源治郎

※中澤俊郷一号は雪城。市河米庵の門に入り書法を学

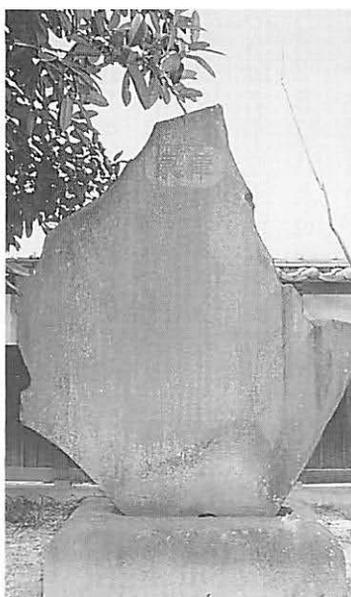
んだ後、巻菱湖に入門し書法を学ぶ。書は

流麗婉美な書風をもって広く流行し菱湖門

下の四天王のひとりに数えられた。



拓本写真



石碑写真

(2) 繁翁碑

所在地 下奥富一九〇九番地

建碑 明治三五年（一九〇二）一月

撰者 立川貞之助

書者 立川貞之助

刻者 高橋米吉

大きさ 高さ一五〇cm・幅八三cm・厚さ一七cm



石碑写真



拓本写真

(碑文)

古之學者必有師人非生而知之者孰能無惑惑而不從師其爲惑也終不解矣唯恨乏爲人師者古今通弊而今昔所遺憾也栗原翁通稱繁右衛門資性温厚篤實而不苟事也其先考富右衛門母沼崎氏以文政丁亥三月望日生於本郡奥富邑幼而好數學師事同鄉久保田先生夙夜孜孜而不怠遂熟于業精于術頗究其蘊奧盖以足爲人師者乎遠近後進相傳以受其業者漸加至一百餘人翁平素待其人也懇篤授其業也親切是所謂教不倦者乎今茲鶴齡將垂古稀尚矍鑠然門人感其恩慕其德

相謀而聊銘碑以爲記念云爾

明治壬寅年一月

立川貞之助撰並書

入間川町 高橋米吉刻

(3) 里英翁碑

所在地 下奥富二〇四九番地

建碑 明治二五年(一八九二)十月

大きさ 高さ一四六cm・幅一四七cm・厚さ二五cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

平右衛門者山崎氏字里英小時曰平次郎下奥富藤右衛門之子也以文化十一年甲戌生自幼好書而恆出入花生堂門孜孜習學達其書流爲人傳之於村里兒童其教也至親切茲以生徒四來終至壹百餘人然明治八年有學事之革命於此使四男藤朝修學熊谷縣暢發學校藤朝黽勉熟學科爲奧富小学校之教員開校於其地廣福寺内乃使其徒悉入此校矣爾後明治十一年奉副戶長任從事務矣也終始如一日頗有聲聞焉十五年一月累進于戶長而滿任期矣經年七十有八依之欲其徒刻碑傳乎永遠齋和歌來而以予撰文認書則銘讓其歌也
 明治二十五年一月 慈潤亮有

川越 山崎鶴年鐫
 四徒乃海 あら波堂々傳 久可多能

飛可り長閑介起 君可御代可那

(よつのうみ あらなみたたで ひさかたの

ひかりのどけき きみがみよかな)

(4) 工師山崎翁壽墳碑

所在地 下奥富二〇四九番地

建碑 大正十三年(一九二四)十一月

篆額 金井藤吉

撰者 利根川丈雄

書者 金井藤吉

刻者 山崎鶴年

大きさ 高さ一七四cm・幅一五六cm・厚さ一七cm



石碑写真

(碑文)

工師山崎翁壽墳碑



拓本写真

國親師之謂禮三本有可報之義而知之者歲減其數豈不痛乎如入間郡奧富村下奧富梓人山崎翁徒弟則不然翁名佐一郎父曰川田利助母片岡氏其長子也幼穎悟從鄉先生學讀書筆札年甫十六為梓人奧富勇造弟子以習其業十有餘年業成而歸爾後致職甚勤接人甚睦是以業大行矣家產致裕遂至受社寺學校建築之囑明治廿五年為同村村會議員尋為社寺總代及學務委員大正八年為名譽助役可知以其有望也翁為人誠實

暇日授其所自得曲尺數術於徒弟隣里聞之四至受教者前後數十人性嗜酒後悟其非定限其量而養命與財可謂賢矣娶同村栗原氏舉二男三女僉有孫矣長春吉嗣家今茲甲子梓人弟子粕谷勝次郎唱曰吾等今日綜等金錢出入不使家政紊亂者抑翁之賜且翁幸健康躋六十三聰明不衰故欲建壽碑以報其德何如衆曰可矣於是令翁婿葛貫瀧吉求文於余余曰善哉諸弟子不化澆醜之俗而為此舉余因卜不放乎忠孝之心也翁自是從容自得頤養神身其壽之長不可測矣乃欣然屬文繫以詩曰

發憤勤職 業佔致豐 地方巨室 多翁庠工
六帙加三 眼明耳聰 子孫繁盛 衆徒皆通
粵建壽碑 祝命無窮 嗚呼弟子 克一初終
世之薄者 見此美風

大正十三年十一月 川越 利根川丈雄撰
金井藤吉書並篆額
石工川越山崎鶴年

第五章 柏原地区

(1) 増田正金五百年記念碑

所在地 柏原二二九九番地

大きさ 高さ一二一 cm・幅五六 cm・厚さ一一 cm



石碑写真

(碑文)

増田家元祖大水正金伝云武内宿禰後胤大沢大膳太夫正高三男山田左近将監正国十一代大和郡山住人而俗名伊新之丞世業槍鍛冶槍銘曰武州柏原住人大水正金応永三十二年二月廿三日逝去大正十五年三月為満五百年記念建設

第六章 水富地区

(1) 治水工事成功記念碑

所在地 上広瀬一四三四番地 上広瀬水天宮
 建碑 明治三十六年(一九〇三)九月
 題額 枢密院副議長 伯爵 東久世通禧※
 撰者 華族女學校教授 井上頼圀※
 書者 華屬國學院講師 逸見伸三郎
 刻者 山崎鶴年
 大きさ 高さ二二五cm・幅一五三cm・厚さ一一cm



石碑写真



拓本写真

(碑文)

枢密院副議長正二位勲一等伯爵東久世通禧題字
 埼玉縣入間郡水富村は入間川の沿岸に帝大和國な
 留廣瀬能地勢登相似多流遠以天日本武尊東征乃時
 廣瀬神社遠齋祀し給飛又大字に廣瀬根岸笹井等能
 名あ流母其謂郡里此邊総帝山丘四圍那類賀上耳本
 村は對岸乃豐岡町入間川町尔比寸連婆其地位甚低
 幾賀多米洪水阿留每尔侵害世良流留越以亘村民曾
 て之を憂ひ堤防遠築幾水冊越設氣或は新川遠凌飛
 南杼し帝歲次修繕に怠無加利し母昨年の洪水尔復

舊寸弁可良謝母大破壊遠來勢しか婆地元人民同心協力志弓之乎經營勢舞事を囑尔請飛工事に着手世志は本年四月一日那留哉其築造乃種目は堤防制水堰堤沈床護岸包覆等に氏拾數箇所乎配据し互に相持知相保知帝水勢遠矯米侵入遠防幾以て永遠尔其難那可良志舞時乃知事木下周一君常に治民能志厚久此美譽遠賛称して現場尔茂臨揆志大尔力遠盡佐類遍手事業自然尔進行し滿五月間乎以弓設計乃如久成功勢理此費通計貳萬六千圓以上な利登序嗚呼古連本縣下の一大工事にし帝此一村能至大美拳那流哉今其事由遠石に刻し弓之越千歳乎傳乃舞登欲し予に其文遠乞ふ由て其梗概乎識寿尔那舞嗚呼實に村民賀當時乃歛喜將來の幸福亦以て想寸類尔足良む 明治三十六年九月十日

華族女學校教授從六位勲六等井上頼圀撰文

圖書屬國學院講師

逸見伸三郎墨書

石工川越六反 山崎鶴年

※東久世通禧—幕末の攘夷派公家。明治の政治家。明治初期の外交に尽力。明治二年（一八六九）開拓長官となる。以後、侍從長、元老院・貴族院・枢密院の各副議長を歴任。

※井上頼圀—幕末・明治期の国学者。明治十五年（一八八二）、松野勇雄らと皇典講究所（国学院大学の前身）を設立。「古事類苑」の校閲などを委嘱される。その後、華族女學校教授・学習院教授・図書寮編修課長などを歴任。明治四十三年（一九一〇）、平田学会を設立して「平田篤胤全集」出版に尽力した。

(2) 埼玉県令白根多助歌碑※

所在地 上広瀬一六一二番地 広瀬神社
建碑 明治二十四年（一八九一）四月
撰者 衆議院議員 清水宗徳
書者 衆議院議員 清水宗徳
大きさ 高さ二二二cm・幅二三三cm・厚さ一五cm



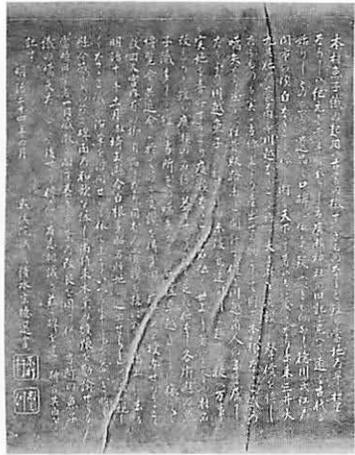
石碑写真



拓本写真

埼玉県令白根多助
奈々子於広瀬乃
浪者安や那累遠
堂れ川越能
名爾流計無

(ななこおり広瀬の
なみはあやなるを
たれ川越の
名に流しけむ)



裏面石碑写真

(碑文)

本村魚子織の起因ハ古書の徴すべきものなしと雖も當地乃早く村里となりしハ紀元壹千年餘なりし當廣瀬神社の旧記に見へて遠く古代に始りしものなるハ遺品と口碑に依りて疑ふべきものなし徳川氏江戸開市の頃白な、こと称し漸く天下に著る、處となりに来三井大丸其他の豪商等川越な、こと称し大に此を賞賛し聲價を博したるものは實に当郷里より産出せる物にして則ち本郷な、こ織乃嚙矢なり然るに往昔販路未だ開けず僅に川越商人の手に属したるより川越魚子と称せしも尔後氣運開明に趣くに從へ万事実地を喜好するより廣瀬な、この名弘く世上に著ハれ今や村名改れりと雖も廣瀬の名称ハ益々世に顯る是れ他なし各府縣の魚子織多しと雖も当所その嚙矢なると品位卓越たるとに依りて博覽會共進會に於て頗る賞賛を得幾回も褒章を授与せらる、こと數回又宮内省の御用品となり同省乃賞讚も殊に厚し尚且つ去る明治十

年十一月故埼玉縣令白根多助君此地に巡回せられ
宗徳に親しくな、こ織の沿革を諮問せらる依て上
にいつる事とも答へき時に縣令感賞の餘に碑面の
和歌を詠し尚將來本業の擴張を勸諭せらる當時同
業者一同感激に耐す益々事業の改良を圖り併て当
所の魚子織の嚆矢たることを後世に傳んと有志相
謀り茲に碑を建て聊か其由を記す

明治二十四年四月 衆議院議員 清水宗徳選書

※白根多助―明治四年（一八七二）十一月一四日埼玉
県設置に当たり、県令野村盛秀と共に、権
参事となる。同八年一二月二七日県令とな
り、没するまで務めた。草創期の県政に取
り組み、埼玉県の基礎を築いた、在任当時
から名県令の声高く、後々まで「徳望の県
令」と語られている。

(3) 芭蕉句碑

所在地 上広瀬一六一二番地 広瀬神社
大きさ 高さ一二九cm・幅一一三cm・厚さ二五cm

物言婆

唇さむし

秋乃風



石碑写真

(4) 清水宗徳頌徳碑

所在地 上広瀬一六一二番地 広瀬神社

建碑 大正三年（一九一四）五月

撰者 文学博士 井上頼圀

書者 御用掛御歌所主事 坂 正臣※

大きさ 高さ三四五cm・幅一三七cm・厚さ二三cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

清水宗徳は埼玉県入間郡水富村上廣瀬の人なり天保十四年一月十一日生まる累世大庄屋にて農を以て聞ゆ性強剛にして事に倦まず夙く予が門に入りて国書を学ひ敬神尊皇愛国の志厚く且よく後進者を誘導し公共の事とし云へば寢食を忘れ家財を抛ちても尽すに至る明治三年村有なる馬草地を毎戸に割渡し桑樹の植付を奨励し細民には無償にて之を辞す同七年郡内の養蚕旧式なるのみならず其の飼育法之甚幼稚なるを憂上信甲の三国を漫遊し自身其業に当り發明せし所少なからぬ以て同八年養蚕室を改築し新飼育を施し衆庶の従覽を許し一般の参賀に供ふ同九年上毛前橋在なる関根製糸場に妻女及村内の婦女十数名を率て至り私費を投して其業を習はしむ同年十一月暢業社製糸場を開設す此県下に於る製糸場の嚆矢なりしか故に当場の女工は漸次練熟するに随ひ新設工場に備はるる者多かりき同十年入間足立大里児玉秩父の諸郡に亘

り製糸上の聊合發展の計画を成し同十二年その直輸出の法を講し同志者と謀りて横浜市に生糸同伸会社を設置し尋て製糸場の余水を利用し更に水車場を造営し米麦の搗挽緒綿の縫掛をなす等に供ふ同十九年本郡蚕糸組合長に選ばれしに尚蚕糸業の完全ならざるを思ひ俸給の全部を寄付し顕微鏡數台を購入して教師を招聘し郡中より卅余名の生徒を募り之講習せしめて開發を計りぬ是を以て県民の信頼を博し初期の県會議員となり又衆議院議員に選ばる同二十三年川越鐵道を布設し地方の便益を増進せむとし屢々上京して諸氏を訪問し財力と苦心とを積み同廿六年成功せしむ同廿四年北門の経営一日も忽諸にすへからずを感じ先石狩國空知郡奈井江の山林原野數百町歩を払下げ四五百人を督して彼地に赴き開墾の業を創め永住者には無代にて其地を讓与一部落を新設したり曾て入間川の河底毎歲淺まり行き沿岸水害を免れざるを憂ひ居りしが東京市に砂利の需要多きを地方細民の業務

少きとに考へ之を採掘して輸送するは自然河身を
浚ひ民業を増し水難を防くに足る事を量り即ち其
筋認許を経て川越鉄道と特約し同廿五年より東京
に輸送を開始せしに其成結頗る良好なりきとそ又
商工業の発展に伴ひ鉄工所の必要なるに当り地方
は野鍛冶のみなるを遺憾として次男をして其業を
研究せしめ以是か県下の主任たらしめ入間川町鉄
工場新設し多くの鉄器械を製造し大に利便となり
ぬ同年七月入間馬車鉄道株式会社の社長兼取締役
となり其俸の全部を投して維持の方法を講し遂に
永続を期するに至ると云ふ嗚呼実に本県に於る有
数の人にして事業家の好亀鑑定たりしを明治四十
二年八月十八日年六十七歳にて病没せしは甚惜む
へし同月廿日神葬式を以て最終の礼を　るその一
世の事蹟は枚挙に堪へされ共今著名なる条項のみ
を総撮して茲に其の梗概を識すになむ

図書寮編修館　從五位勲五等文学博士

井上　頼国撰

恭宮御用掛御歌所主事從五位勲五等　坂　正臣書

※坂

正臣―漢字・かなの調和体が巧妙で、全国の女

学校の習字教科書の八割はその手になった。
その書は平明を旨とし、美的三分実用七分
を標榜して、誰にでも読みやすいよう心掛
けていた。

(5) 鶯蛙吟和

所在地 上広瀬一六一二番地 広瀬神社

建碑 安政五年（一八五八）九月

書者 梅澤台陽

大きさ 高さ二二八cm・幅二二三cm・厚さ一二cm



石碑写真



拓本写真



石碑写真

菴可ら見比尔隔つ櫻可那

瀧川や碎累水耳春農色

際立天見ゆる花野能流可奈

江の浪尔徒連天すゝきの戦ぎ哉

稲妻や遠くも阿らぬ雲催ふ

苗代乃水耳澄介り朝の月

松むし尔さハリて吹やまつ風

藻の花や比照る中を濡天咲

月の暮る田尔並び介里冬乃鷹

餘乃鳥と聲盤競ハ須郭公

山まで盤ひと平那り雪の原

近よ禮者馬も嘶くさく羅哉

大原や何處とも那しに虫の聲

涼風や松耳暮行河原道

世を遍るや更尔心の猿回し

月澄盤香毛一入そ梅乃花

田乃実入十分見えて後の月

積累雪世乃潤ひの者し免可那

里玉

羽雪

豊山

慎風

佳雪

芳雨

緑塘

李月

曾伯

芳玉

柳糸

登月

西笑

泰貫

來夫

義同

水翁

義正

いおりから みごろにへだつ さくらかな

たきがわや くだけるみずのはるのいろ

きわだちて みゆるはなのの ながれかな

えのなみに つれてすすきの そよぎかな

いなずまや とおくもあらぬ くもよふ

なえしろの みずにすみけり あさのつき

まつむしに さはりてふくや まつのかぜ

ものはなや このてるなかを ぬれてさく

つきのくるる たにならびけり ふゆのかり

よのとりと こえはきそはず ほととぎす

やままでは ひとたいらなり ゆきのはら

ちかよれば うまもいなく さくらかな

おおはらや どこともなしに むしのこえ

すずかぜや まつにくれゆく かわらみち

よをへるや さらにこころの さるまわし

つきすめば かもひとしおぞ うめのはな

たのみいり じゅうぶんみえて ひるのつき

つもるゆき よのうるおいのはしめかな

(6) 富士見橋架設記念碑

所在地 上広瀬二一三一番地

建碑 大正一二年(一九二三) 一月

撰者 県会議員 岡野近三

刻者 石工 小池銀次郎

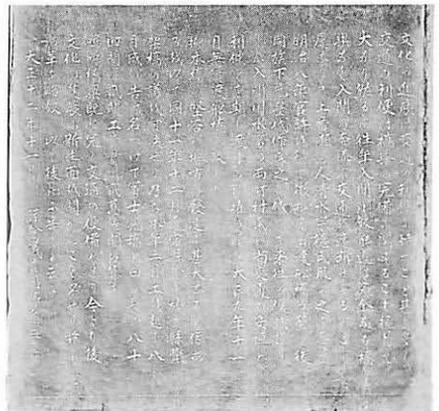
大きさ 高さ二七八cm・幅一〇四cm・厚さ一七cm



石碑写真

(碑文)

文化の進展は交通の利便に待つこと甚々多く交通の利便は橋梁の完備に関わること極めて大なり然るに往年入間川飯能道は完全なる橋梁なく入間乃奔流に交通を遮断せらるゝこと屢なりき上広瀬の人清水宗徳氏夙に之を憂ひ明治八年官許を得て徴料廣瀬渡船橋を營し後同族下邑登代作氏之に代りて来往の便を謀りしが入間川水富の両町村民ハ尚交通の安恒と利便とを期し渡津の利権を贖い大正九年十一月無賃渡船橋に改多り



裏面拓本写真

抑本橋の堅否ハ地方の發達に甚大なる關係あるを以て同十一年十二月通常縣會に於て縣費架橋の議を可決せり乃ち本年三月工を起し八月成を告げ名づけて富士見橋と曰ふ長さ八十四間幅貳間工費實に貳萬餘円を算春

嗚呼橋梁既に完く交通の便備わ連り今より後文化の進展に新生面を開かんこと必せり茲に沿革を略叙し以て後昆に告ぐと伝ふ

大正十二年十一月 縣會議員岡野近三撰

(7) 改葬墳墓碑

所在地 笹井一六一八番地

建 碑 明治三十三年(一九〇〇)

大きさ 高さ一五〇cm・幅一三五cm・厚さ二六cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

夫墳墓者先靈之所託而安焉則其為地最不可不慎撰擇矣我水富村大字笹井菑宮地墓地係元祿以還一閭所共有而地繞水田迫官道狹隘卑濕不足以爲窀穸之地也數年前既有改葬之議而不果行頃者入間川飯能間將設馬車來往之鐵軌墓地正當其絳路於是乎改葬之議再興焉乃選委員相地宣新開墓域至亡亥歲九月二十三日百事悉成乃設典行式以移葬於此庶幾足使先靈永安於此土乎因略叙其故刻石以諗後人云

明治庚子歲秋季皇靈祭日

三申居士陸謹書

(8) 弁財尊天水神御堂再建記念碑

所在地 笹井三〇四六番地 弁財天水天宮

年代 昭和二年(一九二七)

大きさ 高さ一八五cm・幅六二cm・厚さ一一cm



拓本写真



石碑写真

碑背記

本弁財天水神は竹ヶ淵難處の守護神としてこの地に奉齊せしものなるを年久しく他に遷し安置したりき然るを近く幾度もその祟りにはあらずやと思ふ事柄能重なるまま神はかかることのあるべきにはあらねど人心の迷を鎮ませ尊崇のこころみをも深めんと有念の者發企となり昭和二年二月三日三十四ヶ寺に依願し一大河施餓鬼法要を修して逝かれし人の靈を弔ひ二ツルハ昔の型尔従ひて茲に御堂を再建することはなりぬそのよしを一言記すこととるり 昭和二年花盛り日

(9) 芭蕉句碑

所在地 笹井一九六二番地 笹井白髭神社
大きさ 高さ一五一cm・幅一一五cm・厚さ一八cm



拓本写真



石碑写真

(碑文)

武蔵野や

一寸ほどの

鹿の声

平成12年3月31日発行
狭山市文化財報告 22

狭山の石碑

発行 狭山市教育委員会

狭山市入間川一―二三―五

電話 ○四二(九五二) 一一一

印刷 光版社印刷株式会社

狭山市入間川三―三一―三

電話 ○四二(九五三) 一三五八

